

撮られるのは音楽に興じるその姿

緑の原っぱ、焚火、とまどい

はじめてミュージックビデオの撮影に参加したのは2007年、ウガンダ共和国の首都カンパラの中心部から少し離れた場所にある美しい緑の原っぱでだった。肌が白くて瞳が青い、ヨーロッパのどこかからきた白人の女性が、ウガンダ人の男性の隣で恋人役を演じてほほ笑んでいた。撮影の中心となっていた主役の小柄で痩せすぎのそのウガンダ人男性Tは、歌手であり、伝統舞踊からヒップホップダンスまでマスターする踊り手でもあり、私のよい友人だった。持参するよう頼まれたリュックサックを彼に手渡したあとの私は、普段着のままでどこにもなく、周囲の人たちと言葉を交わしながらなんとなく時間をつぶした。ときどき指示に従って、現場に流れているTの歌う音楽をバックに、白人女性の友人役のひとりとしてカメラの前でつくり笑いを浮かべた。撮影は夕方暗くなるまで続いた。最後は火を焚いてまわりを囲んだ。予定が読めないのんびりとした撮影は、逆に私を落ち着かない気分にさせた。

ビクトリア湖畔の舞

次の撮影は2010年、友人の男性Mから出演依頼を受けて行ったビクトリア湖畔。私はMの恋人役を頼まれた。出演者はその歌を歌っているMを含む2人の男性と私、そしてMと同じ職場で働いている男性、と少人数だった。ビデオカメラを手にした撮影スタッフの男性とMは相談しながら、コンクリートで固められた広場や階段、湖畔に舳ってあった小舟を使って撮影を進めていく(写真①)。延長コードを使ってぎりぎりの状態でつなげられたCDプレーヤーからはMの曲がエンドレスで流れ続ける。それに合わせてMたちは口を動かして歌っているふうを装い、私は横でなんとなくリズムをとる。すると、私た

78



写真①ビクトリア湖畔でのMの撮影の様子(2010年8月)

ちの様子を見ていた見知らぬ男性が突然割り込み、Mと一緒に踊り出し、それも撮影される。「こういうのもありなのか」とその現場を私はながめた。Mの普段の仕事は、マニキュア塗り。いつも細かく丁寧に動かしている指先は、少し野性味を感じさせるMの目の先で、ふわふわと上下していた。

撮影スタッフから“実況レポーター”へ

同じ2010年、もう一件別の撮影現場に訪れた。現場の様子を手持ちのデジタルカメラで撮影してほしいと頼まれたためだ。昼間に訪れた街の中心部にあるバーの屋内は真っ暗で、しんと静まり返っていたが、電気をつけて撮影用の照明を焚いて、歌手でありビデオ撮影や映像編集も仕事にしているDに呼びかけられた若手ミュージシャンやダンサー、コメディアンの方々が入ってくると、あっという間にそこに「夜の盛り場」が出現した。ソーダに加えて、揚げた鶏肉やフライドポテトを取り寄せて、それらを飲み食いしながら撮影は進む。私はひたすらデジタルカメラを操作する。「こっち撮ってよ」パシャ。「ここもね」パシャ。「お前も入って撮るぞ」パシャ。いつの間にかビールも飲みだしている。ふとDが私に言う。「日本語で実況してみてよ。セレブのすげーパーティやってて盛り上がってる！って」

適当にその場で言ってみると、「よし、じゃあ撮影」となる。あわてて私はノートに自分の台詞を書き出す。何度かつぶやいて練習。覚悟ができてからDに声をかけると、2、3度Dの前で言われた直後、撮影。いっぱいいっぱいだった私は、思わず実際に存在するテレビ局の名前を口走ってしまう。一瞬だけ某キー局のレポーターに転身する私。そして続けてそのレポーターは、撮影カメラの前で、若手ミュージシャンと2人きりで踊らされたのだった。

浴衣姿で「狂乱」

2011年、Pに浴衣を持ってこいと言われて、駆け付けた。Pは前年のDの撮影現場でソロダンスを披露していた男性。もともとダンスの才能に長けていた彼は、盛り場でダンスを披露していたが、歌手活動も開始しており、新しい曲ができたときにちょうどウガンダにいた私もそのミュージックビデオに出演しろということになったのだ。撮影現場は郊外にあるコンクリート打ちっぱなしの建物。建てている途中で資金がなくなったのか中途半端なつくりの建物と、周囲に無造作に生えている背の高い雑草には、ときが止まっているかのような静けさがただよっていた。そこにPに呼ばれたダンサーやコメディアンたちと、今回も歌手として参加すると同時

に歌の制作から撮影もこなすDに呼ばれた若手のミュージシャンたちが、2台のワゴン車で乗り入れる。一定の振付の指導がPからダンサーたちになされたあとは、流されるPとDの曲に合わせて、撮影カメラの前で何度もメンバーが入れ替わり立ち代わり踊り続ける(写真②)。浴衣に着替えてスタンバイしていた私も途中で呼び出されて踊る。私が踊っている様子に、撮影現場のみんなが笑う。みんなに盛り上がってほしくて、一緒に踊っている人にされるがまま、ウガ

ングでウケのよい卑猥な動きも取り入れる。どっと笑いが起きる。PとDも笑顔を見せた。

瞬時に立ち上がる歌、映像

2012年、5回目は、Dが日本に向けて曲をつくるぞと、歌制作から参加させられた。以前実況レポーターとして撮影に参加したときの曲のメインのメロディーと歌詞を使い、それを私が日本語に訳して私が歌う。数回だけスタジオで歌って



写真②カンパラ郊外でのPとDの撮影の様子(2011年6月)

録音すると、それがすんなりと採用される。曲の始まりに、「日本と言えば」と琴の音を選び出したあと、曲全体をあっという間にコンピューター上で仕上げていくD。ビデオの撮影は私の帰国前ということが条件になり、数日後に決定。なんでもいいから見栄えのする格好で来い、と言われて、ウガンダでの常識(女性は基本的にステージに立つとき足を見せる格好をする)に合わせる、少し短めのスカートを用意する。Dのスタジオ近くの駐車場兼物置きと化している敷地や道端で撮影をおこなう。私とPの友人もやってきて、コミカルな踊りを踊ってくれる。撮影の様子を遠巻きに見ていた近所の子もたちが、そのうち踊り出したので、その姿も撮影された。私が日本に帰国した1週間後にはそのビデオは完成していて、動画サイト「ユーチューブ」上で躍動していた。この映像を世界中の人たちが見るかもしれないということよりも、ウガンダの若者たちの手に握られたスマートフォン上で、もしくはDJたちによってダウンロードされて、カンパラの盛り場のスクリーンやテレビで流されることになるかもしれないと思うことのほうが、こそばゆい。動画のタイトルに添えられた「フィーチャリング ミドリ(私の名前)」という文字にも笑う。私はただ必死にその場でできることをしただけだったのだから。

ミュージックビデオのその後

原っぱで撮影をおこなったTのビデオ、ほかの日にも撮影をしていたようで、失恋の歌にもかわらず、いや、だからなのか、出来上がりの映像には、白人女性とTとの大胆な絡み合いのシーンが満載で驚いた。私は本当に申し訳程度に映っていただけだが、テレビでも放映されていたそのビデオは、ウガンダの視聴者の興味をそそったに違いない。このビデオによってTがどこまで有名になったかどうかは定かではないが、Tは現在も歌手活動を続けて、たまにコンサートを開きつつ、ダンスグループのプロデュースもしている。彼の「フェイスブック(SNS)」上では、少しやせ型で貧相に見えなくなかった10年前の体型を保ちつつも、スマートな業界人としてスーツでパリッときめた姿が日々発信されている。

私が恋人役として出演したMとのビデオは、ほとんど日の目を見ることはなかった。Mがバーをまわって、制作したビデオを流してくれないかと頼みに行くのにも同行したが、そのビデオ放映により、彼の歌手としての人気が上がったという話は聞いていない。私がカンパラを訪れるたび、彼が変わらず女性たちの爪に丁寧な仕事を施している姿を見かけた。彼は彼の道をきちんと歩んでいるものの、恋人役としての魅力が

足りなかったか、と私は少しばかり気落ちしてしまう。

一方、私に浴衣を着せて、恋人役ではなくイロモノ扱いでビデオに出演させたPとDとのビデオは「ユーチューブ」にあげられ、100万回を超える再生回数を記録している。Pは現在も、ダンスを披露したり、ダンスを教える仕事に平行して、歌手業も精力的に続けている。音楽およびビデオの制作をD以外の人間にも依頼して、Pが繰り出し続けるミュージックビデオは、本人の服装も撮影舞台も協力者も編集技術も、どんどん手の込んだものになっているように感じる。でもきっと、現場の雰囲気はあまり変わっていないのではないかと私は推測している。ある程度の撮影内容のイメージや方向性は考えつつも、その場で軽やかに、その場の人たちを巻き込んで、アクシデントも取りこんで、段取りがあるようなないような状況で、偶然性を最大限に生かして撮影をすすめる現場。撮影したいものが最初からあるのではなく、撮影していたら出てきてしまったものを映していく現場。最初私をとまどわせた、あの緊張感のない現場だ。

基本的にミュージックビデオの撮影現場は、そのプロモーションする音楽がエンドレスで流れ続けている。その音楽に合わせて、空気は張り詰めることなく、でも身体は、心は、高鳴っていく。私には撮影後こっそり交通費程度をくれ

る人があったけれど、撮影に協力した人たちが全員報酬をもらっているわけではなかった。お金を期待した人たちの集まりというだけではとらえられない、音楽をその場で感じて一緒に盛り上がるという音楽をいとおしむ現場が、そこには出現していたように思う。そしてその現場は、きっと今日もウガンダのそこかしこで出現しているはずだ。そう考えれば、私のごちない腰の動きもまた、そういう音楽と仲間との大事な瞬間を切り取ったものなのだと思え、なんとかぎりぎり目を開けて見ることができる。そして「え、今、ウガンダにいるのか？じゃあ今すぐ撮影に来い！」その電話を少し恐れながらも、それでもどこかで楽しみにしている私がいる。

大門碧

82

[参照] (2018年2月現在)

Pati FT. Nico Rynz & Didi 【Bonfaya】

『Wili Wili Dance』<https://www.youtube.com/watch?v=nUDVggdUc3c>

Didi & Pati FT. Midoli

『Odole 【Wili Wili Dance2】』<https://www.youtube.com/watch?v=VhP8sTMUptA>